

近世にみる平重盛 ―その認識の一端

A Study on the description of Taira no Shigemori in the Early Modern Period

塩 山 貴 奈

SHIOYAMA Takana

キーワード：平家物語 小松家 法名

はじめに

平重盛は、『平家物語』においてことに重要な位置づけをされる人物のひとりである。しかし、この時代の人物の常ではあるが、重盛もその生涯をとおしての記録が十分に残っているとはいえず、断片的な資料に頼らざるをえない部分がある。小稿でとりあげる重盛の法名もまた、同時代の明確な記録に欠ける事柄のひとつである。

同時代の記録が残っていない以上、後世の編纂資料をもとに考えるほかにいわけだが、重盛の法名は資料によって証空とも、浄蓮とも記されている。これは、『平家物語』も同様である。『平家物語』には多くの諸本が伝わり、諸本によってその内容にもさまざまな違いがあるが、たとえば延慶本は重盛の出家にかんしては言及するものの、法名

は示さない。他方、屋代本は重盛の法名を照空とし、覚一本などは浄蓮と伝えており、それぞれに異なっているのである。

いったい、こうした重盛をめぐる歴史叙述の多方向的な展開はどのような背景によるものなのか。以前稿者は、重盛の出家にかかわる記事を持つ諸資料の比較から、歴史的事実としては証空であったと考えられること、しかし、『平家物語』が流布・展開してゆく過程で、重盛の法名として浄蓮という新たな名が成立したのだと指摘したことがある（注1）。『平家物語』が語らんとする「清盛―重盛―維盛」の系譜こそが平家の嫡流であるという「歴史」を描き出すにあたって、重盛の法名が証空であることに違和感が抱かれるようになったらしいのだ。というのも、重盛の父清盛の法名は浄海、子息維盛の法名は浄円であったという。通字や偏諱といった慣習が定着した中世において、名は当

人の出自や立場を反映するものであり、きわめて重い意味を持ったことを考えるならば、重盛の法名が証空では、すなわち、平家嫡流の系譜が「清盛（法名浄海）—重盛（法名証空）—維盛（法名浄円）」とあっては、重盛の法名ばかりが浮いているように感じられるのも無理はあるまい。ゆえに、平家嫡流の系譜によりふさわしい法名として、浄蓮という新たな名がうみだされたのではないかと論じたのであった。つまり、重盛の法名の問題とは、平家嫡流という系譜の描き方の問題、彼らをめぐる歴史叙述の問題と地続きなのである。

前稿では紙幅の都合もあり、言及できない資料もあった。それら多くは近世以降の資料となるが、いずれも重盛の法名にかんする歴史認識の展開を考えるうえで、興味深いものである。よって、小稿ではそれらの資料の検討から、重盛がときに証空とされ、ときに浄蓮とされたことが、その後の重盛をめぐる歴史叙述に何をもたらすことになったのか、そこから何を見てとることができるのかということを考えてい。

重盛の法名にかんする記述は、ほんの些細な歴史叙述である。しかし、そんな小さな「歴史」からみえてくる、そうしたところにこそ浮かび上がってくる『平家物語』と社会の歴史認識との関係性、交渉の行く末をとらえてみたいと思う。なお、論述の都合上、前稿と重複する説明や資料がある。

一 「証空」か「浄蓮」か

重盛の証空という法名は鎌倉時代の成立とされる『皇帝紀抄』以来、『帝王編年記』、『神皇正統録』などに確認される。一方、浄蓮という法名にかんしては、応安四年（一三七二）成立の覚一本『平家物語』にみえており、すくなくとも十四世紀の後半には、重盛の法名は証空とも、浄蓮ともされていたことがわかる。ただし、これはあくまで現代のわれわれの視点から見たばあいの話であって、中世の多くの人々にこうした二通りの説があるというような認識はなかっただろう。さまざまな資料を収集し、照らし合わせ、証空と伝える資料と浄蓮と伝える資料の二種類が存在しているという事実にとどりができたのは、そうした資料考証的営為が可能な一部の層に限られていたはずだ。

では、『平家物語』が成立し、さまざまな諸本が生み出された中世を経て、近世の社会に生きた人々は、重盛の法名をどのように認識していただろうか。これも結局は、その人物の社会的立場、ようするに知的環境との距離次第ということになるのだろうが、それを念頭に置きつつも、その具体的な様相を探ってみたい。

近世には印刷技術の発展に伴い、『平家物語』の版本も流布することになる。『平家物語』にはさまざまな諸本があると述べたが、近世に版本として広く出回ったのはなんといつても流布本『平家物語』である。ほか、下村本系、覚一本、中院本、城一本も版本として刊行されているが（注2）、城一本をのぞいて、いずれも重盛の法名を浄蓮と伝える本である。

A 流布本 卷第三「医師問答」

七月廿八日、小松殿出家し給ぬ。法名は浄蓮とこそ附給へ。聽て八月一日の日、臨終正念に住して失給ぬ。御歳四十三。世は盛とこそ見つるに、哀なりし事ども也。

B 下村本 卷第三「医師問答」

七月廿八日小松殿出家し給ひぬ。法名は浄蓮とこそつき給へ。やがて八月一日臨終正念に住して失給ひぬ。御年四十三、世は盛とこそみえるつに、哀成し事共也。

C 覚一本 卷第三「医師問答」

同七月廿八日、小松殿出家し給ぬ。法名は浄蓮とこそつき給へ。やがて八月一日、臨終正念に住して遂に失給ぬ。御年四十三、世はさかりとみえつるに、哀なりし事共也。

D 中院本 第三「小松殿くま野さんけいの事」

同しき七月廿日、おと、出家し給ひて、ほうみやうしやうれんとそなのり給ける。おなしき八月一日、おと、つゐにこうし給けり。御とし四十三、りんしう正ねんとそきこえし。およそこのおと、のうせられぬる事は、一かう平家のうんめいすゑになるのみならず、世のためもかならずあしかるへし。

E 城一本 卷三「いしもんたう」

同き七月廿八日小松殿出家し給ひぬほうみやうはせうくうとこそ付給へ。同き八月一日りんじうしやうねんにぢうしてうせ給へり。とし四十三。世はさかりとこそみえつるにあはれなりし事ともなり。

くわえて、やはり近世には版本として刊行された『源平盛衰記』も、子息維盛の出家の場面に関連して、「或説」のなかで重盛の法名が浄蓮であることに言及している（後述）。

十四世紀に成立した覚一本『平家物語』が浄蓮説を採っていたこともあり、近世以前から重盛の法名としては証空より浄蓮という名のほうが広く流布し、社会に定着していったと思われるが、右のような重盛を浄蓮と伝える『平家物語』諸本が版本として流通したことによって、ますます浄蓮説が優勢となっていたことは想像がつく。実際に、近世において重盛の法名が浄蓮と認識されている例をいくつかみてみたい。

たとえば、『平家花揃』。『平家花揃』は、『平家物語』の主たる登場人物を花などにたとえて評した書であるが、頼原文庫本は『平家花揃』本文に注が加えられたものとなっている。以下は、頼原文庫本の重盛にかんする注部分である（注3）。

此小松内大臣重盛公法名浄蓮は、清盛公の嫡男也。文武二道の名を兼て得給ふ大将也。すまひのせつは安元年中、其比は未大納言右大将成へし。安元二年左大将にうつり、同三年三月五日内大臣に任せらる。同三年八月一日薨去し給ふ。御年四十三とぞ。

これらの注は寛永十九年（一六四二）に付されたといい、榊原千鶴氏によれば頼原文庫本『平家花揃』が「近世初期に『平家物語』がどのようなに享受されていたか、その一端を知る手掛かり」になるという（注

4)。法名浄蓮、八月一日の死去（注5）、生年四十三といった記述は、覚一本系『平家物語』諸本の記述に合致するものであり、頼原文庫本の加注の際には、そうした『平家物語』ないしはそれに依拠したような資料が情報源として用いられていたことが伺われる。

また、近世には系図のたぐいもさまざまに作成されるが、『寛永諸家系図伝』（注6）や『諸家大系図』（十三冊。『本朝皇胤紹運録』を加えて十四冊のもの）（注7）、明暦二年（一六五六）の跋をもつ『新版大系図』（注8）なども重盛の法名を浄蓮としている。

『諸家大系図』にしろ『新版大系図』にしろ、いずれも辞書的な説明としては、同書は『尊卑分脈』の江戸時代の刊本ということになる。ただし、『諸家大系図』・『新版大系図』ともに中身をみると、こんにちよく参照される新訂増補国史大系の『尊卑分脈』（底本林家訂正本）とは大きく異なる記述が少なくない。重盛にかんする記述もそのひとつなのだが、たとえば『諸家大系図』は、重盛について「平治年中下向大和国司之時於宇治溺死」という不思議な説を掲載している。

この『諸家大系図』の重盛の記述にかんしては、蘭学者・戯作者・狂歌師といったさまざまな顔を持ち、多岐にわたる著作の知られる森島中良（一七五六?—一八一〇）の随筆『桂林漫録』（寛政十二年「一八〇〇」刊）において、つぎのように言及されている（注9）。

大系図ニ。内大臣正二位重盛。平治年中下向大和国司之時。於宇治^ニ溺死^ス。法名^{サキガケ}浄蓮。号^ス二小松ノ内府^ト。と記せり。一門入水の嚆矢なり。

（巻下「重盛溺死」）

中良は、重盛の平治年間溺死説に疑義を呈するどころか、それを踏まえて、これが平家一門の入水の嚆矢なのだと付け加えているのである。これにたいして、畑維竜の『四方の硯』（文化元年「一八〇四」刊）には、一応まじめな指摘がみえる（注10）。

印行の書に「平内府重盛公一門中に入水の最第一と大鏡と云書にあり」とするせり。相識児島某、うたがはしきことに思ひて、大鏡を見たりしに、重盛^{モト}ノ兄基盛、為^{オホミ}大和守^ト将^ヲ赴^{オモムカフ}任^ニ路^ヲ涸^ミ於宇治川^ニ溺^レ水^ニ而死云々。基盛と重盛ならべ載本文、誤て重盛の下に混せる。年号を考るに筆者の誤りうたかひなしと語りき。後生細心に読書する人ありて、かゝる杜撰^{ツッパシ}をたゞすことあり。作者はこゝろをこまかにもちゆべきことなり。

（『四方の硯』）

刊行時期や内容からして、「印行の書」は『桂林漫録』を指しているかと思われるが、傍線を付した児島某の考察はそれなりにまっとうである。すなわち、宇治川で溺死云々というのは平基盛にかんする話であって、それが「大鏡」では誤って基盛の横に並んでいる重盛のことにさ

れてしまったのだらうというのである。基盛が大和守時代に宇治川で溺死したというのは歴史的事実とは異なるものの、この指摘はある意味で正しいのだが（後述）、しかし『四方の硯』のこの一節には、はしばしに不審な箇所がある。

まず、「印行の書」を『桂林漫録』とみるならば、『桂林漫録』が重盛溺死説の典故としているのは『大鏡』ではなく『大系図』である。『大鏡』という書名をいったん棚上げするとしても、典故である資料に「重盛モト兄基盛、為レ大和守ト将ヲ 赴オモムカフ任ニ路ミヅノミチ 泗ニ於ニ宇治川ヨボレテ一 溺レ水ニ而死」と載っているというのもよく分からない点がある。典故からの厳密な引用ではなく、いくらかの言い換えがなされているとみたとしても、重盛が溺死したとする『諸家大系図』にも「泗」（ミズアソビ）にあたるような語はない。また、「大系図」は「大系図」でも『新版大系図』では、重盛ではなく基盛が溺死したことになっているのだが、こちらでも「平治年中下向大和国司之時於宇治川溺死」とあるのみである。「泗」に相当する表現を含む「大系図」が存在していたと考えられなくもないだろうが、これはむしろ、他の資料から得た情報が流入しているのではないかと思われる。

というのも、基盛が大和守時代に溺死をしたという話は『源平盛衰記』巻第四十三「二位禅尼入海並平家亡虜の人々附京都注進の事」にみえるが、ここで基盛は「大和守に任じて上洛の時」宇治川で「水練して遊びけるに、水に流れて死にけり」とされている（注11）。「泗」という字は「およぐ」とも読むものであり、『四方の硯』において基盛が「泗」によって溺死したとあるのは、こうした知識が反映されていそうであ

る。しかし、結局『四方の硯』がなぜ典故の書名を『大鏡』としているのかは、よく分からない。類例は見いだせていないが、あえてそう書いているのか、もしくは、たんに維龍の誤りなのか。後者のばあい、同書で維龍自身が述べている「杜撰」な著述にたいする批判、作者たるものの心構えのくだりがそのまま維龍の身にかえってくることになるが、いまこれ以上のことに踏み込む材料がないので、このあたりでとどめておく（注12）。

何にせよ中良が重盛溺死説を載せる「大系図」を見ていたことは間違いないさそうだ。右にのべたとおり、「大系図」といっても『諸家大系図』では溺死したのは重盛、『新版大系図』では基盛になっている。皆川完一氏によれば、刊行時期としては『諸家大系図』が『新版大系図』に先行するということで（注13）、『諸家大系図』の重盛にかんする誤記載は『新版大系図』では一応解消されたらしい。

しかし、そもその話として、中良のような知識人が重盛の平治年間溺死説をよしとしていること自体に違和感があるわけだが（注14）、森銑三氏の言葉を借りれば、この重盛溺死の一節は中良の「茶目性」が出ている、ということらしい（注15）。ようするにこの一節は、「大系図」記載のありえない「歴史」をまじめぶった口ぶりで引用し、そこにそれらしい注釈をつけるという、説明すればするほど野暮なくだりであるようなのだ。重盛が溺死していないことなど当然知っているのである。

さて、いささか脱線したが、こうした文脈のなかでも、重盛の浄蓮という法名は、特段問題視されることもなく、誰からも異議を唱えら

れない、当然のものとして処理されていることが分かる。このほか芸能の世界に目を向けてみても、重盛が浄蓮とされている例が目にとまる(注16)。

さながらめくら乞食の悪七兵衛景清と。昔の我名を我心に思ふも苦し足なみや。…首にかけたる袋をひらき取出せば。錦の包にうやうや敷肉を清めし鬻。押いたゞき石上にすへ備へ。合掌かうべを。地に付て。南無。小松の内大臣平ノ朝臣重盛。浄蓮大居士速証菩提。唱ふる声もかきくれて消へ。入る計のひだんの涙。

(『大仏殿万代石楚』三段「糸竹ひめみちゆき」)
 蔦絵すつたる手箱より重盛公の。絵像を取出しさらく。と。仏間にかけて手を合せ。小松の内府浄蓮大居士。仏果ほだいと回向して…

(『義経千本桜』第一「北嵯峨庵室の段」)

このように、近世の多くの人々にとって、重盛は浄蓮であつたらしいのだが、そうはいっても重盛の法名を証空とする言説が途絶えたわけではない。

さきにみたとおり、証空説を採る『平家物語』の刊行もあつた。『平家物語』にかぎらず、たとえば、『本朝歴代法皇外紀』(寛文七年「一六六七」序)巻末に付される「武將家落髪標目」では重盛は証空とされているし(注17)、黒川道祐(？一六九二)の『日次紀事』をみて、八月の初一日には「内府平重盛公忌」として「治承三年今日薨法

名証空歳四十三」とあり(注18)、北村季吟(一二二四—一七〇五)の『菟芸泥赴』においても、重盛について「法名証空と号す」とみえる(注19)。寺島良安の『和漢三才図絵』(正徳二年「一七二二」自序)なども、証空という法名を載せている(注20)。また、水戸藩によって編纂された『大日本史』が『帝王編年記』を典拠として重盛の法名を証空としていることも注意される(注21)。全体としてみれば浄蓮説に押しやられていたようだが、重盛の法名を証空とする説は姿を消したわけではなく、たしかに存在し続けたのである。

二「浄蓮」と「証空」の邂逅

浄蓮説が優勢となりつつも、証空説も並行して存在していたとなると、浄蓮説を「歴史」として享受していたひとびとが、何らかの経緯で、重盛を証空と伝えるモノ(文字資料、伝承)に偶然遭遇するようなことも起こりえた。以下の資料は、まさにそうした両説の邂逅の顚末、ないしは両説の攻防ともでもいふべき様子を伝えるものとなっている(注22)。

享保辛亥の冬、堀習斎氏に、一士人の家にて世語に邂逅す。習斎氏の物語に、近頃、大阪の北に中り、田辺と云ふ村有り。平野に近し。此に一寺あり。昔は阿弥陀堂不動院と云ひき。黄蘗の末寺に成りて、普門寺と云ふ。此頃囲炉古びたるに依り、造り変へんとて開き見れば、其下に一尺程の方石あり。夫を取りのけ、□を

しつらへ、方石を庭に出だし置けり。年久しく土に埋れ、初は文字の跡も見えざりき。数日の後雨か、り土少々落ちければ、小松の二字隠然として顕はる。寺僧とくと洗ひそ、ぎ見れば、

己 治承三年

小松内府証空公

亥八月朔日

と有り。堀氏歸りて平家物語を考ふれば、重盛は法名を浄蓮と号して、証空とは無し。何なる故にて、此処に納め置き、法名も如此なる事量り難し。亦訂古の一端ならずや。

〔『輜軒小録』「小松内府墓之事」〕

『輜軒小録』は、儒学者である伊藤東涯（一六七〇～一七三六）の隨筆である。堀習斎（儒学者の堀南湖）から普門寺の方石の存在、そしてそこに「小松内府証空公」と刻まれている旨を聞いた東涯は、『平家物語』をもとに考えをめぐらす。『平家物語』には重盛の法名は浄蓮とあって、証空とはない。では、なぜこの方石がその寺に収められ、それも証空とあるのか。東涯が参照した『平家物語』は、重盛の法名を証空ではなく浄蓮とする本であったようだ。

さて、かつての阿弥陀堂不動院（当時においては普門寺）から掘り出されたという方石だが、これはたしかに実在したものらしい。木崎愛吉『撰河泉金石文』（大正三年「一九一四」）には「寺は明治の初年に廃滅し、…重盛公の石塔は同処伊達氏の庭中にて建てありしに、同家退転後その所在を失せりといへり」とあって、明治のうちに所在不

明となっていたようである（注23）。

東涯は、『平家物語』を情報源として重盛の法名を浄蓮と認識しており、くだんの方石において、なぜ重盛が証空とされるのかと疑問に思う。また、本話のもうひとりの登場人物である堀習斎も、おそらくは重盛の法名を浄蓮であると認識していたからこそ、方石に証空とあるのを意外に思っ、この話を披露したのでらう（注24）。

また、この『輜軒小録』の話と似た例として、曲亭馬琴（一七六七～一八四八）や屋代弘賢（一七五八～一八四一）らが持ち寄った種々の話を記録する『兎園小説』に続く『兎園小説外集』の「駿州沼津の近村香貫靈山寺に相伝小松内大臣重盛公宝塔の図并搨本」をあげられる。なお、ここでは図は省略する（注25）。

正面 靈山寺殿証空大居士、

両脇 □□三戌亥八月朔日、

弥兵衛宗清建之

右の年号摩滅して読がたし。土人は建久三年に、弥兵衛宗清が建る所なりといひ、支干は戌亥といはれる如く、隠然として見ゆれども、戌亥は古より無き支干なり。重盛公の薨年は治承三年己亥なれば、もしくは治承ならん歟。只戌の如く見ゆる字不審。三年己亥なれば、必摩滅せるは治承なるべし。重盛公の法号を靈山寺殿と称せし事、いまだ搜索に暇あらず。姑く土俗の口碑のまゝに記しつ。猶他日審訂せんのみ。

文政九年丙戌春三月廿五日

海棠庵

著作堂言、治承のむかしは、いまだ何居士などと唱る法号あることなし。曾我兄弟の法号なども、皆後世浮屠のつけしものなれば、この小松殿の墓表も、当時のものにはあらず。甚疑しき事にこそ。

又云、宗清は弥平兵衛と諸書にみえたり。こゝに弥兵衛とあるもいぶかし。

「海棠庵」は書家の関思亮、「著作堂」は馬琴だが、ここでは重盛の法号が「靈山寺殿」や「何居士」、すなわち「証空居士」とされていることに疑義が呈されている。右の言いぶりからして、馬琴の脳裏には重盛の法名を「証空」とする説があることは想起されていないように思われる（注26）。

これらの記事は、証空説がさまざまな形で社会に残りつつも、ときにそれは素性の知れないものとして受け止められつつあった、そんな当時の状況をよく反映しているだろう。ただ、驚かされるのは、近世には重盛の法名を証空と伝える墓石のたぐいが色々に存在していたらしいということである。証空説を載せる書物というのは、じつはさほど多く残っているわけではない。というより、重盛の法名について記す書物自体がそれなりに限られているのである。そのため、中世における証空説の周知の度合いや、浄蓮説成立以降の両説のせめぎあいの様相などはみえづらい部分もあるのだが、こうしたモノが残されているというのは、証空説の享受という意味でも注目されよう。

三 「歴史」のバリエーション

重盛の法名は、歴史的事実としては「証空」であつただろう。しかし、名にたいする当時の文化的慣習・社会的感覚や『平家物語』の歴史叙述の都合から、「清盛（法名浄海）—重盛—維盛（法名浄円）」という系譜にいつそうふさわしい重盛の姿が求められることになり、それに応じるかたちで「浄蓮」という法名が用意されたのだと考えられる。さきにも述べたとおり、これが前稿で述べたことであつた。

しかし、そうした理屈から新たな法名が用意されたというのならば、ひとつふたつと言わず、それらしい法名が色々に成立していそうなものである。中世において重盛の法名をめぐる「歴史」にどの程度のバリエーションがあつたのか（なかつたのか）は資料がかぎられていることもあり、その検証はほとんど不可能だが、たまたま現在まで伝わつたのが証空と浄蓮という二通りの法名だったにすぎないという可能性は十分考えられることだろう。というのも、重盛の子息維盛にかんしては、重盛以上に法名をめぐるさまざまな「歴史」が語られていたことが確認できるし、また、重盛にもそれらしい痕跡が見いだせるからだ。前稿でもふれたが、維盛の法名は、『平家物語』の多くの諸本や『尊卑分脈』では「浄円」（静円）と伝えられている。しかし、一部の『平家物語』諸本には、また異なる説がみえるのだ（注27）。

祖父太政大臣平清盛公、法名浄海、嫡子小松ノ内大臣重盛公、法名照宮、嫡子正三位行右近衛ノ中将維盛、法名阿照、生年二十

七歳。寿永三年三月二十九日、那智ノ澳ニ沈畢ヌ。

〔東寺執行本『平家物語』第十「維盛卿熊野参詣事付被入海事」〕
奉_レ御髪剃落_二ケレバ、御衣ヲ召替テ、心蓮上人、「大哉解脱服、無
相福田衣、被服如戒行、広度諸衆生」ト唱テ、奉_レ授_二御袈裟_一。
法名_{〔戒法房〕}トゾ申ケル。

或説云、「父小松内府出家シテ_{〔浄蓮〕}ト申ケレバ、我身ヲバ
_{〔心蓮〕}トイハン」ト仰ケリト云々、可_レ尋_レ之。

〔源平盛衰記〕卷第四十「維盛出家」

東寺執行本（岡山大学本「十二卷本」）もほぼ同文だが、重盛の法名の表記は「照空」の維盛の法名「阿照」は明らかに父重盛の法名照宮が意識されていようし、『源平盛衰記』には「戒法房」とあるほか、「在説」として引かれる「心蓮」も、父重盛が浄蓮であつたからこそ、その嫡男維盛の法名として成立することが可能であつたものだろう。ようするに、その社会を生きる彼らの論理や規範に照らし合わせてふさわしいものであれば、それは十分に「歴史」となりえたし、それを「歴史」として主張しえたのだ。

さて、つぎに重盛についてである。そもそも重盛にかんしては、「それらしい法名」の最たるものが浄蓮であつたことになるが、このほかにも、中世までさかのぼりうるかどうかはともかく、色々の説が成立していたことを確認できる。

日本の津々浦々には、重盛とのかかわりを伝える「小松寺」が多く存在するが（注28）、茨城県東茨城郡城里町の小松寺もそうした寺院の

ひとつである。同寺に伝わる縁起類も重盛の出家や病死について述べているが、それらによれば、重盛は出家をして「浄空」と称したのだという（注29）。

重盛の法名が「浄空」とされるにいたつた経緯は、さまざまな可能性が想定される。そのベースには証空説があつたのかもしれないが（なense「しょうくう」の「しょう」の清濁が変わるだけで「じょうくう」説は成立する）、何より、父清盛の法名が浄海、子息維盛が浄円であることが強く意識されていただろう。また、十四世紀にはすでに浄蓮説が存在していたことを考えれば、証空説と浄蓮説の双方を意識したものとみることできるかもしれない。

さて、このほか、島津忠夫氏が紹介する佐賀県武雄市北方町大字芦原の熊野神社にかかわる資料にも、面白い例がみえる（注30）。『村社熊野神社由緒調査書』所収「熊野三所大権現縁起」によれば、重盛は熊野参詣ののちに病死したことになっているが、じつは祖先の菩提をとむらうべく、従者一人をつれて西国へ向かつたのだという。肥前国にたどり着き、医王寺の静覚法師と出会うのだが、そのとき、重盛はみずからを「浄心」（浄真）という熊野の僧だと名乗っている。その後、文治二年にいたつて重盛は病にかかり、五十歳で没したというが、「浄心」という名も、浄蓮や浄空が重盛の法名として成り立ちえたのと同じ論理によつて支えられているよう。

なお、この「浄心」という法名は、別の資料にも確認することができる。正宗寺（茨城県）に伝わる『諸家系図』も、やや図が乱れてはいるが重盛の法名として、浄蓮とあわせてこの名を併記している（注

31)。「浄心」説を伝えるこれらふたつの資料に直接的な関連があったとは考えがたいであろうし、それぞれの源泉をさかのぼっていつても交わることはないように思われる。むしろ、重盛没から現代にいたるまでの数百年のあいだのいつかの時代に、まったく別の場所で、しかし同じ発想、同じ論理から「浄心」という法名にたどりついた人々が複数いた、そのようにとらえるほうが自然であろう。

これらの重盛の法名をめぐる諸説、豊かな「歴史」が中世にまでさかのぼりうるかはわからない。近世以降の産物というものもあるだろう。しかし、こうした限定的にしか伝播せず、広範には流布しなかったような、ばあいによつては後世に伝わらず時空のどこかへ消えていったような「歴史」は、浄蓮説成立以前にも、以降にも、さまざまに存在していたのではないかと想像させるものではあるだろう。

おわりに

ここまで、重盛の法名という視点からいくつかの資料をみてきた。はじめに述べたとおり、証空であろうが浄蓮であろうが、重盛の法名とはじつにささやかな歴史叙述である。しかし、その変遷や享受の様子をたどつてゆくことで、重盛の法名、ひいては平家嫡流の重盛という存在、彼をめぐる「歴史」がどのようにとらえられてきたのかを見てとることができる。その意味で重盛の法名とは、分かりやすい目印となるものである。

さきにも述べたように、水戸藩によつて編まれた『大日本史』は重盛の法名にかんして、証空説と浄蓮説があることを踏まえたうえで、

証空説を第一に採っている。『大日本史』編纂のために作成された『参考源平盛衰記』においても、いずれの『平家物語』諸本や歴史資料が証空・浄蓮と伝えているのかが整理されている(注32)。また、こうした大掛かりな事業の成果でなくとも、小稿でもいくつか引いたが、近世にも証空説を是とする資料は存在していた。

しかし、それでも現代の辞典類の多くが重盛の法名を浄蓮と伝え、わたしたちもそれを「歴史」として受け入れているというのは、『平家物語』が清盛—重盛—維盛(そして維盛の子息六代)という彼らこそが平家嫡流なのだとして位置づけて以来、そうした「歴史」を描きだして以来、その「歴史」が中世、近世を経て、いまなお効力を失うことなくわれわれの歴史認識に作用しつづけていることを示しているだろう。

【注】

- (1) 拙稿「平重盛の法名をめぐる」(『国語国文』第八十八巻第十一号、京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇一九年十一月)
- (2) 大津雄一・日下力・佐伯真一・櫻井陽子編『平家物語大辞典』(東京書籍、二〇一〇年)の研究編「版本(古活字本・製版本)」の項参照。なお、流布本の引用は梶原正昭校注『平家物語』(おうふう、一九九五年)、下村本は日本古典全集、中院本は今井正之助・千明守編『校訂中院本平家物語』上(三弥井書店、二〇一〇年)、城一本は國學院大學図書館デジタルライブラリー(登録番号・貴1958.1069、句読点を補った)による。
- (3) 引用は榊原千鶴「京都大学頼原文庫蔵『平家花摘』」『名古屋大学

『国語国文学』七九、名古屋大学国語国文学会、一九九六年十二月）による。

(4) 前掲注3 榊原論文参照。

(5) 頼原文庫本『平家花摘』では「同三年八月一日」とあって、そのまま読むならば安元三年（一一七七）ということになるがむしろこれは誤りであり、正しくは治承三年（一一七九）である。

(6) 第六「清盛流」。斎木一馬・林亮勝・橋本政宣校訂『寛永諸家系図伝』第六（続群書類従刊行会、一九七八年）による。

(7) 『諸家大系図』は国立公文書館デジタルアーカイブ（請求記号1550401）や国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」（請求記号153791-13）にて画像を確認した。

(8) 『新版大系図』は国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」にて画像を確認した。請求記号や0731-30、151601-30。

(9) 引用は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成新装版』第一期・二（吉川弘文館、一九九三年）による。森島中良にかんしては、石上敏『万象亭森島中良の文事』（翰林書房、一九九五年）や、石上敏校訂『森島中良集』（国書刊行会、一九九四年）等から多くを学んだ。

(10) 引用は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成新装版』第一期・十一（吉川弘文館、一九九三年）による。翻刻に際し、私に句読点や濁点等を補った。

(11) 『源平盛衰記』卷第三十二「落行人々歌」にも基盛が宇治川で亡くなった旨の記述がある。『源平盛衰記』は中世の文学（三弥井

近世にみる平重盛（塩山貴奈）

書店）による（巻第四十三以降は『新定源平盛衰記』（新人物往来社）。なお、基盛にかんしては『本朝通鑑』（続本朝通鑑卷第五十八）の二條天皇永暦元年（平治二年）に「平基盛赴大和国」¹⁾。路涉宇治川。而溺死。」とみえ、また、『大日本史』はやはり『源平盛衰記』を出典として「為大和守、及将赴京師、路泗於宇治川溺死」としている。引用は、『本朝通鑑』（国書刊行会、一九一九年）、洋装活字本・侯爵徳川家蔵版の『大日本史』（吉川半七、一九〇〇年）による。

(12) 曲亭馬琴『烹雉の記』（文化八年「二八一」刊）には、『四方の硯』における畑維竜の考証の不手際を指摘している箇所がある。『四方の硯』には「非人」について述べた節があるが、馬琴いわく、『四方の硯』は三代実録を引いて「非人」という語の濫觴としている、しかし三代実録の刊本に「非人」とあるのは正しくは「罪人」で、印刷出版の際に部首が落ちたにすぎず、維竜は三代実録の善本を参照していない、というのである。これにたいし維竜も黙っておらず、ここから維竜と馬琴のあいだで互いの著作にたいする批判の書状が行き交っている。詳細は柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第六卷・別巻（八木書店、二〇〇三年・二〇〇四年）を参照されたい。また、『烹雉の記』は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成新装版』第一期・二十一（吉川弘文館、一九九四年）によった。

(13) 皆川完一「尊卑分脈」（皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題』下巻、吉川弘文館、二〇〇一年）

- (14) 中良の他の著作に目を向ければ、当然ながら『平家物語』についてふれている例はある。たとえば考証随筆『見聞雑誌』では、『平家物語』を引用しつつ待宵小侍徒にかんして述べているが、その引用をみるかぎり流布本的な本文である。ただし、流布本にしたがえば「待宵」の名の由来の歌は「待宵の更行鐘の声聞けば帰る朝の鳥はものかは」となるが、『見聞雑誌』における下の句は「飽ぬ別れの鶏はものかは」とあって、『新古今和歌集』所収の同歌の句が取られている。『平家物語』諸本のなかでは、延慶本や長門本等が「飽かぬ別れの…」としている。『見聞雑誌』は石上敏校訂『森島中良集』（国書刊行会、一九九四年）による。
- (15) 森銑三「偉人暦」十二月四日 桂川中良（森銑三著作集『続編別巻、中央公論社、一九九五年※初出、一九二四年十二月』）。なお、森氏以前にもこの話に言及している例があるので、ふれておく。河田熊「平重盛溺死の事」（『史学雑誌』第七編第二号、一八九六年二月）は『桂林漫録』の重盛溺死説の正誤について述べたもので、河田氏も桂川中良が見た大系図は悪写の本で、基盛についての注が重盛に付されていたのだらうと指摘する。そのうえで河田氏も「重盛の薨去は、仮令い事實は齟齬するにもせよ、治承三年なるは、盛衰記等に明らかなれば、夫等を知らざる桂川氏にも非らされとも、或は好奇の心より此誤を致せしならん」という見解を付けてくわえている。
- (16) 引用は原道生校訂『豊竹座浄瑠璃集一』（国書刊行会、一九九一年）、新日本古典文学大系『竹田出雲並木宗輔浄瑠璃集』による。
- (17) 『続々群書類従』第二。清盛の法名も「武將家落髪標目」に浄海と記されているが、維盛は「貴胤碩臣出家標目」のなかに名があげられ、さらに、その法名は浄蓮とされている。
- (18) 『新修京都叢書』第四卷（臨川書店、一九六八年）による。
- (19) 卷第二「月見橋」。『新修京都叢書』第一二卷（臨川書店、一九七一年）による。
- (20) 卷七十二之本「山城国」重盛の項。『和漢三才図絵』は日本庶民生活史料集成による。
- (21) 『大日本史』では、まず証空の名を示し、そのうえで『平家物語』では浄蓮とされていること、また、『平家物語』でも八坂本などは照空とされていることもあげている。
- (22) 引用は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期二十四（吉川弘文館、一九七五年）による。
- (23) 木崎愛吉『撰河泉金石文』第二章附載「廢普門寺伝平重盛公石塔」（『大日本金石史』四、歴史図書社、一九七二年）
- (24) この『輜軒小録』の記事は松浦静山（二七六〇～一八四一）の『甲子夜話続篇』卷之五十「小松内府の碑并薩州禰寝氏」にも引かれており、重盛の墓のこと、転じて六代の子孫という禰寝氏のことなどに話が及ぶのだが、法名にかんしてはふれられていない。また、志賀南岡（一八〇二～一八五〇）の『所聞庵』では、さきの『桂林漫録』と右の『輜軒小録』の双方を取り上げ、重盛の溺死や法名について、かなり丁寧な考証がおこなわれている（ただし、一部の記述には疑問もある）。『甲子夜話続篇』は東洋文庫、『所

開庵』は森銑三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦編『隨筆百花苑』第十五卷（中央公論社、一九八一年）による。

- (25) 引用は日本隨筆大成編輯部編『日本隨筆大成』第二期・三（吉川弘文館、一九七四年）による。

- (26) 馬琴は『平家物語』諸本のなかで流布本、長門本、『源平盛衰記』を参照していることが確認されるという。松尾葦江「長門本平家物語の伝本に関する基礎的研究」（『平家物語論究』、明治書院、一九八五年※初出、一九七三年十二月）、大高洋司「曲亭馬琴と平家物語―長門本享受への一視覚―」（松尾葦江編『海王宮―壇之浦と平家物語』、三弥井書店、二〇〇五年）参照。なお、馬琴は考証隨筆『玄同放言』第二集卷三人事部二「小松ノ内大臣（平重衡並北条時頼徴行余論附出）」では、『平家物語』や『源平盛衰記』を典拠としてつづ重盛の熊野参詣等について言及しているが、法名にかんしての記載はない。『玄同放言』は日本隨筆大成編輯部編『日本隨筆大成新装版』第一期・五（吉川弘文館、一九九三年）による。

- (27) 東寺執行本は『東寺執行本平家物語』下（うもれ本文庫、一九六五年）、岡山大学本「十二巻本」は岡山大学池田家文庫等刊行会編『平家物語』第十（福武書店、一九七四年）による。

- (28) 小松寺にかんしては、水原一「小松寺の記」（水原一編『古文学の流域』、新典社、一九九六年※初出、一九七三年三月）にさまざまな紹介がある。

- (29) 茨城県史編さん中世史部会編『茨城県史料 中世編Ⅱ』解説「東

近世にみる平重盛（塩山貴奈）

茨城県」小松寺文書（茨城県、一九七四年）

- (30) 島津忠夫「筑紫路の平曲―『平家物語』生成の論のために―」（『平家物語試論』、汲古書院、一九九七年※初出、一九六二年八月）

- (31) 東京大学史料編纂所の所蔵史料目録データベース（HECAT）にて謄写本の画像を閲覧した。請求記号 Z3753。

- (32) 『参考源平盛衰記』は改訂史籍集覧による。

